―想いの右手――

／ＯＰ

――ウィンターローズ、ナイドホグル雪原。
一年を通して溶ける事のない氷雪に包まれ、一面を白銀へと染める平原。
照らされる雪面は光を虹色に変えて、白一色の世界に華やかさを添え、より幻想的な世界を作る。
静寂さえ保たれているならば、この世界に心を浸すのも悪くなかろうが、そんな呑気な事をしている暇は無いようである。
開けた平原は見通しが良い。だからこそこの場所を選んだのだ。
白色の上を黒が押し寄せてくる。静かな雪原に地鳴りが響いてくる。平和な世界に、暴力が襲い掛かる。
害虫。人類の敵である。
圧倒的な力の前に為す術無く蹂躙された歴史を経て、我々はこれに対抗する力を手に入れた。
世界花の加護を受けた、花の名を冠する騎士。花騎士（フラワーナイト）である。

敵の軍勢は十五弱ってところか。こっちは五人。単純な数でみれば三分の一だ。万が一を考えて多めに準備したが、戦力差は歴然だな。

「おっと、お客様がいらしたぞ。誠意を持ってもてなしてやろう」

それぞれの武器を構え戦闘態勢へと入る花騎士達に倣い、俺も腰に下げた得物を手にする。

「速攻！」

敵を視界に捕らえ、交戦距離に入る彼女達に凛とした掛け声が放たれる。

編隊した部隊を仕切る花騎士、シンビジュームだ。飾り気のない髪に眼鏡と、いかにもおとなしく真面目そうな彼女は、見た目通りにおとなしくて真面目である。

しかし、そんな普段とは裏腹に戦闘時の彼女は先手必勝、攻撃重視のパワープレイヤーだ。

かのデンドロビウム――彼女が如何に凄い花騎士なのか、丁寧に説明したい所だが、今回は割愛する――に戦闘訓練を受けており、彼女の訓え通り、とにかく初手の一撃を重視する。最初の一撃で倒しきれば、その後の攻撃を受ける事も無い。引いては危険も少ないという、至極理に適った戦術である。

シンビジュームの体にも染み付いているようであり、彼女を交えた戦闘では、瞬間火力がとかく大事となる。

先陣を切って敵の群れへと突っ込んで行くシンビジュームが己の間合いに入った瞬間に、その手にもつ巨大な槌を地面へと叩きつける。

懇親の力が篭められたそれは、デンドロビウムから受け継いだ秘技、華砕拳である。有り余る衝撃に地面が隆起し、地を這い歩く害虫が宙へと浮かび上がる

槌を投げ捨て、それらを追いかける様に自らも跳躍する。しかして追いかけるのではない、害虫よりもより上へと上昇し、己の魔力を解放するように左手が繰り出される。

同時に彼女のイメージが魔力として、純粋なチカラとして具現化された巨大な拳が害虫を叩き潰す。

尚、大地を叩く初撃をデンドロビウムは震脚で行っている。以前シンビジュームに震脚で出来ないのかと訊いたところ、あんな芸当はデンドロビウムにしか出来ないと笑っていた。

槌で出来るのも大概だと思うが。

シンビジュームの先制攻撃に応える様に、他の花騎士達も次々と己の技を披露していく。相手に攻撃する暇なぞ与えず、一気に攻め切る。

時間を図る必要も無い、開幕と同時に幕引きを向かえる。

ふむ、この分では俺が戦う必要はなさそうだな。あちら側にしてみれば地雷原に足を踏み入れた気分だろう。近づくものから順に必殺技の応酬だ。

だがまあ、例えこの場にいたのがシンビジュームではなかったとしても結果は同じだ。一瞬で終わるか、じっくり終わるか、その違いだけである。わざわざ苦痛を長引かせない分、彼女の方が有情だと思って安らかに眠るがいい。

押し寄せる暴力は、それを上回る力で圧倒できる。実にシンプルな理論だな。

白銀に伏せる害虫の群れ、決して気持ちのいいものではないが、圧巻ではある。

今回の任務は比較的楽だったな。

さあ、とっとと撤収して温かいコーヒーでも飲もう。如何に美しいとはいえ、寒くてかなわん。

一応の警戒の為、武器の柄に手を添えていたが大丈夫そうだな。

と、手を放した時、ぎし、と雪の軋む音がした。

　斃れる害虫の群れの中から、一体の影が立ち上がる。
　直撃を免れたか、あるいはやられたフリをして寝ていたのか、カマキリ型の害虫の生き残りがいたようだ。
　くそ、失敗した。油断したつもりはなかったが、あの猛攻の中生きているはずが無いと慢心したか。
　そのすぐ傍にいるのは、シンビジュームである。当然、やつの狙いは彼女となるだろう。
　生きている害虫が残っていた事に、彼女も気づいたようだ。だが、どうにもこれは、間が悪い。
　シンビジュームの華砕拳は槌での初撃により大地を震わせてから拳で二撃目の攻撃となる。槌は邪魔なのか空中へと飛ぶ際に、適当に放り投げているのだ。
　当然、その後に転がる槌を拾う事になり、彼女が技を放った後は、どうしようもないくらいの隙ができてしまう。
　まだ武器を拾っていない彼女の名を叫ぶが、害虫はもうシンビジュームに狙いを定め、攻撃に掛かっている。

なんとか害虫の気をこちらに向ける事は出来ないか、今更ながら武器を取り走り出すが、駄目だ。間に合わない。

鈍く光る鎌が振り上がる。

対するシンビジュームは素手。ここは回避に専念してもらい、その間にこっちで叩くしかない。

「シンビジューム、避けろ！」

けれど彼女は躱そうとしない。こっちの言葉が届かないのか、それとももう間に合わないと思っているのか。

否、そんな筈はない。シンビジュームも敵に気づいているし、あの距離なら充分に対処できるはずだ。

ならば何故、と疑問を抱くもそれはその瞬間に解消される。

更に一歩踏み出し、空拳を突き出す。振り上げられた鎌が下ろされるよりも早く、敵の懐へ右拳を叩き込んだ。更に同じ場所へと放たれた左手が外殻を貫く。

雪原を引き裂く様な声で害虫の苦痛に唸る。耳をつんざく不快な叫びを意に介さず、奇怪な声を上げるその顔に脚を抉りこませる。

よろめき倒れた害虫に止めの追撃を行う。飛び上がり、拳を構えて自重の全てと共に害虫へと落下する。
ぐしゃり、と気味の悪い破裂音が奏でられる。
それはどうしようもない程に、その害虫の終末を告げる音だった。
他に敵影は無し。今作戦の目標は殲滅した事を確認し、シンビジュームは、ふう、と胸に手を置いて一息つく。
張り詰めた表情が僅かに緩み、途中で槌を拾いつつこちらに小走りで寄ってきた。
「団長さん、作戦無事終わりました」
安心した様に淡い笑みを浮かべて、作戦終了報告をする。
眼鏡のフレームから少しずれた所でみせる上目遣いがなんとも言えない。
「ああ。お疲れさま、よくやったな」
頭を撫でてやると、最初は少し驚いて目を丸くするが、すぐにくすぐったそうに目を細めて恥ずかしそうに俯く。照れているのか、さほどずり落ちていない眼鏡を直している。
うむ、かわいい。

しかし、流石、デンドロビウムの訓練を受けただけの事はある。シンビジュームは素手でも戦闘可能だったか。

だが、あれは……。

◇

絢爛でこそないが、豪華。質の良い家具で揃えられた客間。ウィンターローズの寒さを耐え抜く堅牢な木を加工して作られたテーブルと椅子は、落ち着いたくすみを見せ、しかして暖かみを残している。

テーブルには大皿があり、スコーンとビスケットがそれぞれ数個ずつ盛り付けされている。

「作戦終了後、どうしても寄って欲しいとせがまれたので、カトレアの屋敷でシンビジュームとお茶をすることになったのだ」

「折角だから、少し寄っていいかと言ったのは団長さんじゃないですか……」

おっと口に出てしまったらしい。

トレイに乗せたティーポットとティーカップをテーブルに並べていく。陶器の触れ合う音を立てずに手早くこなす姿は、実に堂に入っている。このままメイドとして連れ帰りたいくらいだ。

「他の三人は、いないのか？」

ここはカトレアの屋敷である。先の作戦地であるナイドホルグ雪原から程近いところにある屋敷であり、花騎士であるカトレアと、オンシジューム、そしてこのシンビジュームが住んでいる家である。

今でこそ住んでいる、と表現できる。少し前まではそんな易しい表現はできなかったが。

「カトレアさんとオンシジュームちゃんは別の作戦でベルガモットバレーに行っています」

こうして作戦にしても私用にしても、外に出る機会が増えている。ここは彼女を隠すための場所ではなく、彼女の帰るべき場所だ。

「デンドロビウムさんは何でも国王直々のお願い事があるとかで、しばらくはこっちには寄れないと言っていました」

国王直々のお願い事って、相変わらずデンドロビウムの底が知れない……。
ん？　という事は、今日はこの屋敷には誰もいないということか。これは
「間違いが起きても仕方ないな」
「仕方なくないですよ！」
また口に出してしまったようだ。
「なんだ、シンビジュームは俺と間違いがあっちゃあ嫌なのか？」
「嫌です」
「嫌なのか！」
うわ、真っ向から否定された。冗談で言ったことだが流石にちょっと傷つくわ。
「その……団長さんとは、間違いじゃなくて、ちゃんと、そうなってほしいというか……」
「じゃあちゃんとそうなろう！」
「決断が早すぎます！」
といいつつも顔真っ赤にしてまんざらでもなさそうである。あれ？　これこのまま寝室流れこめるんじゃないか？

「どうぞ」
と思ったら、紅茶が目の前に出された。
あんなしょうもないやり取りをしつつ、しっかりお茶を淹れてくれていたようだ。
よく手を止めなかったな……。
このままシンビジュームをからかっているのも魅力的だが、折角淹れてくれたお茶だ、冷めないうちに飲まなくてはもったいない。
自分の分も淹れ、席につくのを待ってから、ティーカップに口をつける。優しい香りが鼻腔を抜ける。程よい温かさの紅茶が体内に入り、ウィンターローズの厳しい気候に冷えた身体の緊張が緩む。
「どうぞ、お菓子も食べてください」
すすめられるままに皿に並んだスコーンに手を伸ばす。紅茶と一緒に食べるにはちょうどいい。控えめで上品な甘さは、そのままでも勿論、ジャムやバターを塗って食べても美味しいだろう。きっとカトレアの好みに合わせて、シンビジュームが作ったに違いない。
「うん、美味い。やっぱり手作りは違うな」

「買ったものですよ」
……。
「え、そうなのか？　前に食べた手作りのと似てたから、ああ、成る程。これを参考にしたんだな」
「いえ、団長さんに手作りのスコーンを出したことはありませんが」
……。
完全敗北だった。
「あの、別に無理に話題を作らなくてもいいんですよ？」
「いやあ、そういうつもりじゃ無かったんだがな」
褒められてちょっと照れる顔が見たかっただけだんだが、どうも失敗に終わってしまったようだ。あまり茶化してばかりいても仕方ない。本題に入るとするか。
「……さっきの任務だが」
任務、特に討伐任務の後は政府に提出するための報告書を作らなければならない為、本部か駐屯地かに戻るのが普通である。それを後に回してまでシンビジュームと話をしようとしたのは、勿論彼女をからかう為でも、お茶をする為でもない。

勘違いされたら困るのでもう一度言っておこう。彼女をからかう為でも、お茶をする為でもない。

「一体、害虫が残ったよな」

津波のように押し寄せる必殺技の猛襲の中、どういうわけか一体だけが生き延びていた。生き残ったからといって不思議ではない事だが。

「すいません。わたしの詰めが甘かったばかりに」

「いや、それはいいんだが。最後の一体、素手で戦ったよな？」

「はい。それも申し訳ないです。華砕拳を撃つ時、どうしても邪魔になってしまうので」

一度手放す必要がある。それは今までの戦闘を見ていればわかる。そして技を放った後に、拾わなければならないのもわかる。

だからその間、もし敵を殲滅できていないのなら、彼女を守らなければならないのだ。それは承知のことであり、今迄もそうしてきた。

だからこそ今迄分からなかった事であり、今日は少しばかり油断してしまったからこそわかった事である。

「お前さ、素手で戦ったほうが強くないか？」
「そう、でしょうか……？」
驚いたように自分の手を見つめる。
普段の槌を使った戦闘でも充分強いのだが、攻撃方法、型、その動きはデンドロビウムの戦闘方法そのものだ。
もしかしたら、シンビジュームは最初から今の戦闘スタイルだったのではないのかもしれない。最初はデンドロビウムと同じく体術での戦闘方法を学んでいたのではないだろうか。
訓えは誠実に、忠実に守る彼女である。デンドロビウムの動き全てを正しく体に覚え込ませていてもおかしくはない。
確かに、一撃の破壊力は槌の方が大きいかもしれない。けれど、あれだけ動けるのなら、いっそ格闘術へと切り替えた方が強いのではないだろうか。
「そうですね……。本当はそうなのかもしれません」
己の右手を見つめながら、握ったり開いたりを繰り返す。その顔はどこか嬉しそうで、そして僅かに悲しそうでもあった。

自分でもわかっているのだ。デンドロビウムに教わった事を、それに費やした時間を。しかし、でも、と言葉を続ける。

「今はまだ、そうするわけには行かないんです。この右手は、無闇に使うことを禁止されていますから」

そういえば、デンドロビウムは華砕拳を右手で放つが、彼女は左手で放つ。シンビジュームが左利きだというのなら、別段おかしくはないのだろうけど、彼女の利き腕は右である。以前からそこに妙な違和感はあったのだが、何か理由があるのか。

使ってはいけないとされる程の理由が。

「聞いて、くれますか？　団長さん」

不安げに上目遣いで見つめてくるその視線に、頷いて答えるしかなかった。